

vol.67

2011年12月20日

APPROACH

編集責任者：総務部長 大嶋 巖

<http://www.jodc.or.jp/approach/>

▲バックナンバーが閲覧できます。

1. 事業紹介
加藤 伸一郎専門家（フィリピン）
2. 浅井 博康専門家（ミャンマー）
3. 水野 成夫専門家（カンボジア）
4. 理事長からのエール

APPROACHは、海外各国で活躍されているJODC専門家の指導現場での貴重な体験談を掲載しております。

貿易投資円滑化支援事業の紹介

当協会では、経済産業省の委託を受けて、今年度より東アジアを中心とした開発途上国における貿易・投資活性化のための環境整備に向け、日本の経済発展の基礎となった経済制度・システムや技術・ノウハウ等を普及するために、現地業界団体等に対して専門家を派遣する貿易投資円滑化支援事業（専門家派遣事業）を実施しております。

この事業では、日本の経済発展の基盤となった技術やシステムと共通する産業基盤やソフトインフラ等の整備を進めたり、開発途上国の経済発展を阻害している産業構造、経済制度・システム等の改善を図っています。このような目的で派遣されている3名の専門家の声をご紹介します。

加藤 伸一郎専門家 Mr. Shinichiro Kato
フィリピン マニラ

派遣期間： 2011/7～2012/2（その間の181日間）

指導内容： フィリピンITPEC（Information Technology Professionals Examination Council）事務局設立支援に関する技術指導

日本発の試験制度がもたらしたもの

フィリピンは、シンガポール、タイ、ベトナムといった東南アジア諸国の中でも、貧困や汚職、犯罪といった暗いイメージを持たれている方が多いのではないのでしょうか？

有名な話で、フィリピンに赴任する人は3回泣くと言われています。赴任前は「何でフィリピンに赴任しないといけないのだ」と泣き、赴任中は「なんと住みやすいところだ」と感動して泣き、帰任の際には「まだ帰りたくない」と泣くそうです。このように、フィリピンに赴任した方々は、何かしらの魅力を感じ、フィリピン派になる方が多いようです。

昨今、フィリピンは世界のITアウトソーシング市場として大変注目されており、インド、中国に次いで世界第3位の市場シェアで、今後更なる市場シェアの拡大が期待されています。

フィリピン政府は、フィリピンのITアウトソーシングの更なる成長のために、人材育成に力を入れていますが、この人材育成支援のため、日本政府は日本の情報処理技術者試験制度をフィリピンに紹介し、同試験制度のフィリピンへの導入支援を2001年より実施しております。

この支援により、フィリピンに試験実施機関PhilNITS（Philippine National IT Standards Foundation）が設立され、ITパスポート試験、基本情報技術者試験、応用技術者試験を毎年実施するようになりました。毎年100人から200人の合格者を輩出し、IT産業界から高い評価を受けています。

日本の情報処理技術者試験制度を導入した国は、6カ国（フィリピン、タイ、マレーシア、ミャンマー、モンゴル、ベトナム）あります。この6カ国でITPEC（IT Professional Examination Council）を設立し、アジア共通統一試験として実施するようになりました。このITPECを中心的にまとめ、リーダーシップを発揮したのが、PhilNITSのアコール理事長です。アコール理事長は、初代ITPEC議長としてITPEC設立に尽力され、その後のITPEC事務局設置への道を開きました。

小生は、本年度、ITPEC事務局設立支援のためPhilNITSに派遣されました。そこで、ITPEC事務局の機能強化をするとともに、ITパスポート試験新規導入のための指導をしております。また、本年9月にはITPEC責任者会議にも参加し、各国の試験センターの代表者と率直な意見交換が出来ました。この会議の中では、各国の情報処理技術者試験制度導入への強い情熱と、日本に対する期待と感謝の気持ちを強く感じました。

日本発の試験制度、技術標準が複数国に導入される例は大変稀であると思います。フィリピンでも、日本からの支援のイメージというと、橋や空港といったインフラ支援を思い浮かべる人が多いです。そのような中で、試験制度というソフト面での支援というのは、時代にあった大変意義のある支援であると強く感じます。

最後に、受入企業であるアコール理事長について述べさせて下さい。彼女の父親は、戦争中の「パターン死の行進」で日本兵に100キロ歩かされた捕虜の一人でした。本来であれば、反日でもおかしくないはずのアコール理事長が、日本の試験制度をフィリピンに導入するための陣頭指揮をとっています。そして、この試験制度がきっかけで親日派になりました。



▲情報処理技術者試験に挑戦するフィリピン人IT技術者

浅井 博康 専門家 Mr. Hiroyasu Asai

ミャンマー ヤンゴン

派遣期間: 2011/9～2012/2 (その間の129日間)

指導内容: ミャンマー縫製産業生産管理技術人材育成支援事業に関する技術指導

ミャンマーの大きな変化

ミャンマーは仏教国で、シンボルでもあるシェダゴンパコダは黄金の輝きを放ち、ヤンゴン市内を見晴らす丘にそびえている。

朝のヤンゴンでは、白いシャツと緑のロンジー(ミャンマーの巻きスカートで男女ともに着用)姿の子供や親に手を引かれて通学する小さな子供も多い。ミャンマーは識字率が高いことも特徴である。

茶色の僧衣をまとったお坊さんが托鉢に出てくるのもこの時間帯で、トラックを改造した乗り合いバスも満員だ。お弁当を手に職場に向かう人たちが鈴なりに乗ってゆく。

ミャンマーはゆったりした仏教国だが、朝の街は活気にあふれた様相を示している。



▲町の様子

ミャンマーの衣料縫製工場は発展の真っ只中で、私は縫製産業を対象に管理者の養成を担当している。

2003年の米国による経済制裁で、当時貴重な外貨を稼いでいた衣料輸出は大きな打撃を受けることになった。輸出の60%以上を占めていた米国向けの縫製品の生産がなくなり、工場の閉鎖によって、働き先がなくなった従業員が多数生まれた。

ミャンマー縫製業界の求めに対応し、2008年の調査を経て、2009年からは人材育成の支援を開始した。ミャンマーの縫製業は制裁からは立ち直ってはいないが、日本向けの輸出も増加し少しずつ回復してきていた。日本向けが輸出先の1位になった時期でもある。

縫製協会の事務所内に1台の机を置かせてもらい、MGHRDC(Myanmar Garment Human Resource Development Center)の看板が出来たのは2009年3月で、手始めの支援として縫製ラインを管理するスーパーバイザーを対象に生産管理技術のセミナーを開始した。

当初の会場は工場の会議室などを借りての「モバイル方式のセミナー」であったが、2011年1月に待望のトレーニングセンターが出来た。

国営工場の一部を縫製協会が借りて実現した拠点である。3月からは会員工場に寄付を募って集まった約30台の中古ミシンを使い作業者の養成もスタートした。MGHRDCは管理者の養成に加え、作業者の養成も可能になったわけである。

JODCの派遣で9月にミャンマーに入ったが、ビッグニュースのオンパレードの中で、MGHRDCの支援を行った。



▲研修光景

スーパーバイザー養成セミナーの開催、工場診断指導など、現地への技術指導と技術移転を目指した支援だ。セミナーには2万チャット(作業員養成は1.5万チャット)の受講料を払い受講者が集まってくる。彼らにとっては安くない受講料だ。

大半は弁当持参で10日間の研修を受け巣立ってゆく。5Sではないが、研修生の皆さんには、1日の終わりに研修会場を清掃してもらっている。

昨年11月の選挙を経て、今年初めから新議会がスタートし、3月には新大統領のもとに新しい政権が発足した。8月に新政権が経済フォーラムを開催し、アウンサンスーチー氏と大統領との会談も実現した。これを機に、新政権による規制緩和等の新政策が矢継ぎ早に出され、ミャンマーは大きな変化を開始した。

主なものでも、報道ビザの緩和、為替高に対応し輸出産業支援のための輸出税減免、段階的だが中古自動車の輸入促進策(古い車の所有者には輸入許可を与える)、外国為替の取り扱いを民間銀行にも許可するなど次々と大きな変化がミャンマーに起こっている。

水野 成夫専門家 [Mr. Naruo Mizuno](#)

カンボジア プノンペン

派遣期間: 2011/9～2012/2

指導内容: カンボジア縫製業人材育成機関創設支援事業に関する技術指導

カンボジアでの生活

現在、カンボジアの縫製産業は、ミャンマーやバングラデシュ等の近隣諸国との激しい競争の中、差別化を図っていくため、縫製加工賃だけの委託加工型OEM生産から脱却し、企画提案型の生産を模索しています。

今回、私はその一環として、パターンメイキング(衣類の設計図の作成)に関する技術指導を行うために、カンボジア縫製業協会(GMAC)に派遣されました。

GMAC内には縫製技術者の人材育成機関として、トレーニングセンターが既に設置されていますが、同センターのインストラクターに対し、パターンメイキング技術を指導することにより、パターンメイキングのインストラクターとしても自立させることを目的としています。

GMACが開催した本事業のオープニングセレモニーには、カンボジア政府の要人の皆様が多数参加される等、本事業に対する熱い期待を感じます。その期待に応えるべく、同センターのインストラクターと共に頑張りたいと思います。



▲オープニングセレモニーの様子
(後列右側5番目が水野専門家)

さて、日本人にはまだまだ縁遠いカンボジアについて、現地で暮らしているからこそ見えてきたことも書いてみたいと思います。

まず、建築バブルです。色々なところで工事が行われ、サービスアパートメントやオフィスビル、商店兼住宅が建ち並んでおり、工業特区も整備されています。

そして美しい完成図が描かれた囲いをした更地もたくさん見受けられます。

もはや掘立小屋が続く土むき出しの大きな市場は、プノンペンの中心部では見当たらず、雰囲気の良いレンガや木造の古い民家の数も限られてきました。

打ち捨てられた高層ビルがいくつもあることが気になり指導先のカンボジア人に聞いてみると、カンボジアでは、お金ができると工事を再開し、お金が無くなるとお金が出来るまで放置しておくとのこと。

何とものんびりしているカンボジアです。

また、街中を車とバイクとトゥクトゥク(4人乗りのカート
を引っ張るバイク)がひしめき、走り回っています。

プノンペン市内には公共交通機関がないため、人々の移動は、車、バイク、トゥクトゥクの3種類に頼らざるをえません。

時には自転車も混ざり、3人乗り、4人乗りは当たり前で、中にはお坊さんを載せて突っ走るバイクもあります。

交通ルールがあるようでないのがプノンペンです。

とにかく我先に隙間に頭をにじりこませる車、その隙間ににじりこむバイクとトゥクトゥク、その隙間にさらににじりこむ勇氣ある少数の自転車、その隙間を通り抜けていく徒歩の人もおり、日本人の謙虚さは、カンボジアの交通状況の中には通用しません。

そんな交通混雑に輪をかけるのが結婚式で、雨期が終わり爽やかな風がプノンペンを吹き抜けるようになると、一斉に結婚式の華々しい飾り付けの天幕があちらの道路こちらの路地の家の前に花開きます。

歩道は挙式場に早変わりし、ある天幕は歩道をはみ出し一車線の道路を越え向かいの家まで到達していたかと思えば、ある天幕は少し謙虚に車道半分までだったりします。

混雑を避け抜け道を、と考えた車が結婚式の天幕で立ち往生するのが日常的で、2月頃までこんな風景があちらこちらで見られるとのこと。指導先のカンボジア人に「警察は取り締まりに来ないのか？」と聞いてみると、「大丈夫！これが普通。」だとのこと。

「愛は勝つ！」でしょうか。

カンボジアの人たちを見ていて思うのは、余計な愛想もなく、おもねりもへりくだりも不要な気遣いもない人々だということです。

どんな人もただ堂々と生きているという感じがします。

一見不愛想に見えるけれども、こちらが微笑むとしっかり微笑みが返ってきます。

微笑の裏も微笑み、そんな微笑だという気がします。好意にはしっかり好意で答えてくれ、好意があだとなることが少ないように思います。日常のあちこちで交わすことのできるちょっと恥じらうような素直な微笑や笑顔は以前と変わらず気持ちをほっこりとほぐしてくれます。しかし、これはまだまだ甘い見方なのかもしれません。

長い内戦と混乱が終わって十数年、カンボジアの人々は生き延びるための緊張や構えといった肩の荷がおろさ

れ、人生を謳歌し始めたところなのではないかと感じています。

理事長からのエール

～スーパーコンピュータ「京」に思う～

菅野 利徳



最近、日本の技術水準に関し明るい話題は、情報化社会の鍵ともいべきコンピュータの分野で、富士通と理化学研究所が共同開発したスーパーコンピュータ「京」が、去る11月12日、シアトルで開催されたスパコンの国際会議「SC11」で、一秒間に「京」回(=10ペタ・フロップス、すなわち1千兆回の10倍)を上回る演算回数を達成した事が認められ、今年6月時点(当時は8.16ペタ・フロップスだった)に続いて、世界最速記録を打ち立てたとの報道である。

日本は、一時、スパコン開発分野で最先端を競っていたのだが、多額の開発費用の問題もあって、このところ米国や中国に押され気味になっていた。因みに、日本製スパコンが最速とされたのは7年ほど前に東工大・国際情報センターに納入された「ツバメ」が最後で、その後は、中国の天津SCセンターにある「天河1A」、米国・オークリッジ国立研にある「ジャガー」等のスパコンに追い抜かれていた。今回認定された「京」の性能は、中国の「天河1A」を約4倍上回り、米国の「ジャガー」を約6倍上回る由で、更なる性能アップも見込まれる由だ。

「京」の開発に関しては、一昨年末の最初の「事業仕分け」で「2番ではダメなのですか？」とのやり取りがなされた経緯もあった。しかし、技術の世界での優劣差は、スポーツ等の順位とは異なり、優れた技術が将来の市場を支配していく…それが経済の技術革新に他ならない…ものであろう。

スパコンの性能は、組込む超LSI等のハード面の技術と、並列処理や超高速情報伝送等のソフト技術の双方が鍵を握る。従来から、日本はハード面の技術は優れているとされていたが、「京」は、8.8万個以上のCPUから構成されるなど並列処理等のソフト技術面でも優位性を示したと考えられる。

専門家の皆様にも、優れた日本の技術を海外で根付かせると共に、常に関連技術の動向にも気を配り、また、指導に当たられている国の社会環境も考慮した工夫・改善を加えながらご尽力頂くことを期待したい。